

第三九六回 司召の巻

起句 01) 馬車と決めベルギー大使司召(つかさめし) 七緒
 02) 色なき風に響く嘶(いななき) 悦子
 03) 残暑なお五輪の時候憂いいて 和子
 04) 蟻螂(とうろう)の浮く濁った海水 松陽
 月 05) 秋障子月光仄か舟動く 笈羅
 折端 06) 濃いも淡いも行交う間(あわい) 恆雄
 折立 07) 紅勝てと鯨(いさな)捕る人打電する 七
 恋 08) 二人揃って撞く除夜の鐘 和
 09) 餅焼いて昔の過ち思い出す 悦
 10) 北海道までずらかったなあ 笈
 11) 避暑地でもあおり運転遭遇す 松
 12) などで蚰蜒(げじげじ)を造り給うた 七
 月 13) 夕立の気配立籠め赤い月 恆
 14) 尾を丸くして野良犬の去る 悦
 15) 芽ぐむ山平家末裔栖むという 和
 16) 十二単で摘草をする 松
 花 17) 盃に受けた花びらそつと吹く 笈
 折端 18) 寮歌尻目に鞆鞆(しゅうせん)を漕ぐ 七
 折立 19) 垣根越しくくる回る春日傘 悦
 20) 視界の中央留まる盲点 恆
 21) 琴の音に佐助は拭う手の汗を 松
 22) 滝殿に佇(た)ち鎮める心 和
 23) 青芝を踏む足の裏擦(くすぐ)られ 恆
 24) ラバウル彷徨(さまよ)う水木初年兵 七
 25) 星流るしばし別れの涙落つ 笈
 恋 26) 木犀香る憧れの君 悦
 27) 卓袱台(ちゃぶだい)の団欒深む新豆腐 和
 28) 試食可売りの葡萄農園 笈
 月 29) こそ泥の頬っ被りでゆく月の村 松
 折端 30) 陰影礼賛闇の耀(かがや)き 恆
 折立 31) 三博士聖夜に訪(おとな)うベート・レヘム 七
 32) 黒衣の神父凍鶴(いてづる)眺む 松
 33) 静止せる複雑系の無窮動 恆
 34) 展翅(てんし)されてるカラスアゲハよ 笈
 35) 目覚めると一面に咲く花の窓 悦
 36) 鋭声(えいせい)残しきぎす翔(た)ちたり 和

2019・8・22

於 都内某所

連衆・七緒、悦子、和子、松陽、笈羅、恆雄、